

市電の生みの親

すけがわていじろう
助川貞二郎

市内で唯一市電の残る中央区。明治から大正にかけての発展著しい札幌で活躍し、そこで電車を走らせた助川貞二郎について紹介します。

万延元年（一八六〇年）、今の茨城県に生まれた助川貞二郎は、明治十三年（一八八〇年）に裸一貫で北海道に渡りました。鉄道工事などでにぎわう好景気のなかで商才を発揮し、醸造業（しょうゆう工場）を営み、一六年（一八八三年）には札幌商業組合取締役にもなっています。

しかし、ニシン漁に手を出して無一文となった貞二郎は、一九年（一八八六年）に故郷に戻っています。そこで政治運動に没頭し、第一回の衆議院議員選挙に出て落選。二十五年（一八九二年）には再び北海道へ戻り、土地の売買などで財を成したあと、三十七年（一九〇四年）に共同で札幌石材馬車鉄道合資会社を設立しています。その会社は、石切山からの石材の運搬や旅客の輸送を行うために設立され

ました。

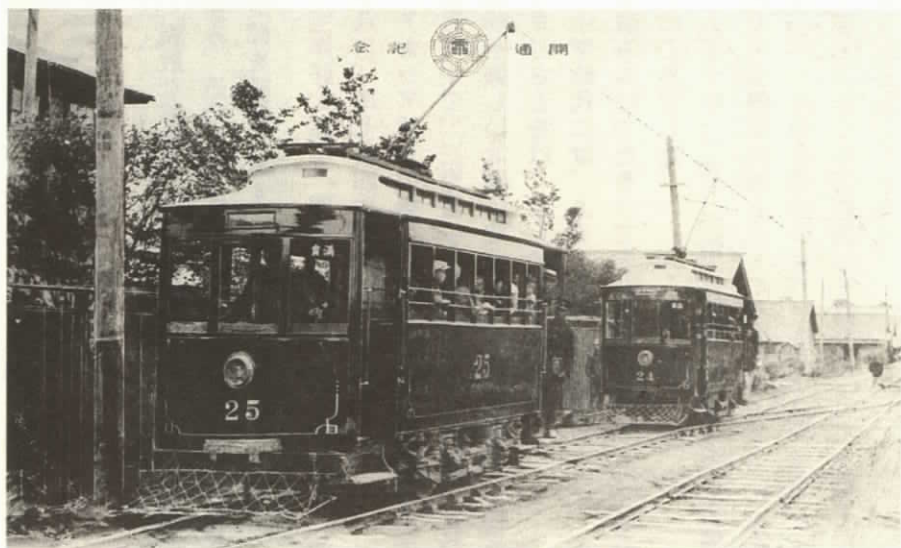
大正五年（一九一六年）、同社は電車を導入するために社名を札幌電気軌道株式会社に変更し、七年（一九一八年）には、開道五十年記念博覧会の開催期間中の八月十二日に電車を走らせました。この時は第一次世界大戦のさなかで輸入するレールや車両が届かず、工事が途中で放置されていたため、市民の不満が募っていたようです。

しかし、電車を走らせてからは大変好評を博し、順調に路線と客足をのばしていきました。

ところが、札幌市から電車事業の市営化の話が持ち上がり、買収されることとなり、昭和二年に札幌市営電車となっています。この買収は、価格面でな



大正8年の助川貞二郎
（札幌百年の人びとより）



大正7年開通記念絵はがき（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）

かなか折り合わず、市営となるまでに約三年を費やしました。

貞二郎は、その二年後に六十九歳で亡くなりましたが、電車事業のほかにいろいろな功績を残しています。例えば、私財をつぎ込んで釈放者の自活を助ける更生保護事業を続け、没後は長男貞利（さだとし）に引き継がれています。また、明治三十四年（一九〇一年）に北海道会議員に選出されたほか、札幌区会議員にもなっています。四十四年（一九一一年）にすべての公職を辞し交通事業に打ち込むようになりました。

なお、現在も除雪に活躍しているササラ電車は、長男貞利が開発したものです。

（平成十一年二月号・第五十四回）